

きくというは、信心をあらはす御のりなり

ご讚題 一、「経」に「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞き
て疑心あることなし、これを聞といふなり、「信心」といふは、すな
はち本願力回向の信心なり。 (Ref「信文類(末)註釈版 P251)

二、「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり、き
くといふは、本願を聞きて疑ふころなきを「聞」といふなり、また
きくというは、信心をあらはす御のりなり、「信心歡喜 乃至一念」
といふは、「信心」は、如来の御ちかひをききて疑ふころのなき
なり。 (Ref「一多証文」註釈版 P677)

一、浄土真宗は聞の宗教であること

浄土真宗は如来様の御本願のおいわれをお聞かせに与る「聞(もん)」の宗教だと言われます。凡夫の浄土往生は如来様から賜る「信心」一つで定まるその「信」を表わすのにご開山聖人は「聞即信(もんそくしん)」として「聞」を大切になさっているからであります。

はじめに「信心」とは何かについてご讚題にお訪ねしてみますと「如来の御ちかひをききて疑ふころのなきなり」とお示しです。如来様のご本願のお誓いをお聞かせに与って疑うところがない状態を「信心」というのだと仰せであります。

ところが、折角、ご本願のおいわれを聞かせて戴いても、凡夫をお救い下さる救い主である阿弥陀如来がいらっしやること、私がそのお救いの目当てであるという肝心要めの事柄がにわかにははっきりと頂戴できない(このような優柔不断な状態を「疑う」と申します)というのが

私たちの現実です。これをさしてご開山聖人は、「難中之難无過斯(お正信偈)」、「無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂まことに獲ること難し(「信文類序」註釈版 P211)」とおっしゃっておいでです。

私たちが如来様の本願のおいわれをいわれのとおりを受け止めることがどんなに困難であるかを示す御文であります。

次に「信心」を動詞表現すると「信じる」となります。信じる主体は私です。すると新たな問題が生じます。それは私が主体になった途端私の計らいが入る余地が生じることであります。これでは本願力回向の信心を頂戴するのに無用の要素が加わる懸念が生じたこととなります。如来様の御本願の思し召しだけでは十分とせずわが計らいを加えて浄土往生の為に役立たせようとする姿勢に繋がる恐れが生じるのです。

このことから「信じる」という動詞表現に際しては十分な注意が必要だということになります。ご開山が「信ずる」という動詞表現をお用いにならないことはないにしても(例えば、正像末和讃「弥陀の本願しんずべし」Ref 註釈版 P600)とりわけ「聞く」ことを大切にされた秘密の鍵の一つはこの辺りにあるのではないのでしょうか。

一方、「聞く」という動詞の場合には「私が聞く」という用法とは別に(如来様のお喚び声が)「聞こえて下さる」という表現が可能であります。「私が聞く」と言うと不遜な私のはからいが入り得る余地があるのに対して「聞こえて下さる」ならば、「私のはからい」という無用の要素が入り得る余地がなくなります。私が「わがはからい」をまじえて聞くのではなしに如来様のお名号の謂れのままにお聞かせに与る(これを「如実の聞」と申します)という次第になるのであります。

親鸞聖人が第十八願成就文に謳われた「信」を語るに当って名号を聞

きとめる段階を抑えて「きくといふは、信心をあらはす御のりなり(聞即信)」と抑えられたのはこうした理由が一つだと考えられます。

二、お聴聞によって何を聞くのか

では、何を聞かせて戴くのかといえば、「仏願の生起本末」であります。

ここで、「仏願の生起」とは、仏願が何故に起こされたかと言ういわれを聞くことであります。ここに苦しみ悩む衆生(私)が居たからであり、次に、「仏願の本末」とは、その私を救い取ろうとしてご本願が建てられ、今やご本願が叶って阿弥陀仏となられ、本願の名号が唯今も働き続けに働いていて下さることをいうのであります。

ところが、先述のとおり一口に「仏願の生起本末」を聞くのだと示して戴いてもすなおにこれをお聞かせに与ることは容易ではありません。

なぜなら自我の殻の固い私は自らが迷界で苦しむ存在であると知らなければ、救い主である如来様がいらっしゃることも知らないからです。この自我の固い殻を打ち破るには、古来、浄土真宗では、「聞いて聞いて聞きぬくことが大事だ」として「お聴聞」が大切にされてきたのです。聞くのではなく聞かせて戴くのであります。こうして愚かな私の姿をお聞かせに与り漸くにしてお救いに与るのであります。法然聖人が「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と言われた所以がここにあります。私自身の内面に目を向けて顧みることがいかに困難であるかが知られます。

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、
たしかにうけたまはり候ひし (親鸞聖人御消息 注釈版聖典 P770)

ここで、本願成就文に立ち返って、「聞」の対象を訪ねてみますと「諸仏如来の讚歎なざる名号を聞く」と示されています。「名号を聞く」とは「名号のいわれ」を聞くのだということが判ります。ご開山聖人は「名号

リビングライブズー「きくといふは信心をあらはす御のりなり」

のいわれ」は「六字釈」に明らかにして下さっています。

そこで「六字釈」を繙(ひもと)いてみますと、お六字とは、如来様の目からご覧になってこの世にまどろんでいる衆生(私)を喚び覚まそうして如来様自らのやるせない思いを込めて喚び続けに喚んで居て下さる「本願招喚の勅命(御喚び声)」であることが判ります。

届いて下さる如来様の御喚び声に対しては「聞く」ことが対応する素直な動作であります。そうするとお喚び声が聞こえて下さるままにこれに従うことが「信」だとおっしゃったこととなります。これがご開山聖人が「聞即信」と押さえられた本質的な理由だとみることができます。

三、称えて聞き入る御名の働き

それでは皆さん、この機会にご一緒にお念仏を両三度頂戴しようではありませんか。称えれば聞こえて下さるものは私の声を超えて聞こえて下さった如来様直々の御喚び声であります。これが如来様が現にましまして働きづめに働いていて下さる何よりもの証拠であります。

それを如来様の仰せであると二心なく疑いなく聞かせて戴くのであります。わが胸の疑いの蓋を取り去り、如来様直々の御喚び声であると聞かせに与るやいなや、如来様の命の水、法水が一瞬にして私という器に飛び込んで下さいます。信心獲得のその時です。

まことに如来様より賜る信心は一瞬にして頂戴できる道理でありました。合掌(玄宥記)。

正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 0一六六
✉・🌐・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥